平成二十三年度

卒業論文概要

2012年1月提出

安中 惠子 …… 1
“来着”について　── 意味・用法の広がり

石塚 萌佳 …… 2
韓寒作品に現代中国の教育問題をさぐる

小黒 心子 …… 3
1960年代、日本におけるプロレタリア文化大革命研究

柄沢 道子 …… 4
沈従文『辺城』研究　── 水との関係に注目して

鈴木 麻美 …… 5
1910年代における日本人の内モンゴル研究

田辺 亮太 …… 6
開城工業団地をめぐる南北関係

倪　舒怡 …… 7
中国における戸籍管理制度
── 中央の政策と内モンゴル自治区の事例と共に ──

毛利 真大 …… 8
『荘子』研究　── 外見的に異常な登場者に関する一考察 ──

矢川 博基 …… 9
植民地期朝鮮における朝鮮総督府の神社政策について

柳　千晶 …… 10
崔仁浩の初期短編小説研究

山田 文恵 …… 11
韓国絵本研究　── 昔話絵本と日本での受容について ──

和田 結衣 …… 12
保定陸軍軍官学校　── 清末明初の軍制改革と保定 ──

綿貫　希 …… 13
日本の朝鮮侵略に対する明朝の対応について

新潟大学人文学部 地域文化課程
アジア文化履修コース
http://hyena.human.niigata-u.ac.jp/files/asiac/asia.html

新潟大学人文学部アジア文化履修コース

“来着”について
── 意味・用法の広がり

安中 惠子

現代中国語において、「回想」の概念は“来着”という語気助詞により表現される。“来着”は学習上の重要語でありながら、なかなか使いこなせない表現の一つである。筆者も北方でよく使われる語彙であるという大まかな認識は持ちながら、辞書類を参照しても一般的な説明に留まり、どのような場面で使われ、どのような意味の広がりを持つのか、といった事がらは漠然としたままである。そこで、本稿において“来着”用法についての整理を試みた。

第２章では先行研究についてまとめた。“来着”は「回想」のために用いられ、「話し言葉に多く用いられる」ことから、“来着”の使用において、どのような文脈で用いられているかが重要であると考えられる。そこで、意味及び形式に加えて、文脈という観点からも考察を行う。“来着”が使われる文脈は、情報伝達という視点から分析が可能であると考える。そこで、“来着”に前置される命題について、話者が内容を把握しているか否かという視点により、“来着”の用法分類を試みる。“来着”の用いられる文脈を話し手、聞き手の命題に対する把握の情況と陳述文・疑問文の文のタイプから分類したものを表にまとめた。文のタイプは ①～⑧ の八つとなり、用例を調査したところ“来着”は ②、③、⑥ の用法で専ら用いられていることが確認された。そこで、本稿では便宜的に ②、③、⑥ をそれぞれⅠ、Ⅱ、Ⅲ とする。

第３章ではⅠ、Ⅱ、Ⅲの用法について具体的にどのような場面、形式で使われているのか、その特徴を確認した。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとは、次のような場面における発話である。

Ⅰ：命題について、話し手も聞き手も知っており、それを疑問文の形式で問いかけるもの

Ⅱ：命題について、聞き手は知らない状況であり、それを話し手が陳述文の形式で伝えるもの

Ⅲ：命題について、話し手は知らないまたはすぐに思い出せない状況であり、それを疑問文の形式で聞き手に問いかけるもの

第４章では“来着”を用いた情報伝達の枠組みが、通時的にどのような出現傾向を経て、現在の用法となってきたかを考察した。調査にあたっては、『白水社中国辞典』にもある通り“来着”が「北方方言区の話し言葉」に使われることから、北方言語を反映しているとされている歴代の文学作品:『紅楼夢』、『児女英雄伝』、老舎作品、王朔作品、に見られる用例を時代順に考察した。

以上、本稿ではまず“来着”について、多様な先行研究の分類を整理した。次に工具書、参考書、異なる時代の作品、『紅楼夢』、『児女英雄伝』、老舎作品、王朔作品から“来着”の用例を集め、それぞれ細かく分類した。

先行研究との違いは、“来着”に前置される命題について、話者が把握しているか否かという視点から分析したことである。これにより、“来着”の出現情況および意味・用法の広がり、“来着”がどのような場面で使われるか、整理をすることが出来た。それによって、時代が下るにしたがって、その適用範囲が変化してきたことを明らかにした。

新潟大学人文学部アジア文化履修コース

韓寒作品に現代中国の教育問題をさぐる

石塚 萌佳

韓寒（1982 ～）は中国で最も公共的影響力のある一人である。ブログを開設してさまざまな社会批判をしている。本論文では、韓寒の中国の教育現場に対する批判などに焦点を当て、『三重门』・『像少年啦飞驰』・『光荣日』・『韩寒五年文集』・『穿着棉袄洗澡』の５作品を中心に、中国の教育問題がどのように取り上げられ、描かれているのかに注目して、中国の教育実態についても整理しながら、考察した。

第一章では、まず、小説の舞台である中学校･高校を中心に、「重点学校制度」はいつ頃から行われたのか、その目的はどのようなものだったのかについて見ていった。小説からは、中国の受験生と保護者の受験に対する温度差がかなりあることがわかる。

第二章では、文革終結後の中国で10年間停滞した専門人材養成の後れをカバーするため、第一章で見た「重点学校制度」がとられたこと、したがって、文革直後の「応試教育」の構造は国家の教育政策から必然的に導かれたものとも言えることを確認した。『三重门』では、「4組の女子生徒の自殺」を通して、世の中の大人たちに「応試教育」が子供たちの精神や身体にもたらした弊害を伝えようとしていると考えた。

第三章では、新中国成立後の中国における教師はどのように育てられているのか、師範教育の歴史について見ていった。学校はさまざまな行動規制によって減点や順位付けを行い、受験教育で生徒の心を縛りつけるだけでなく、生徒の行動までも型にはめようとしているのが読み取れた。

第四章では今中国で高まりつつある、手段を選ばず、高く売れるものなら何でも作り、他人の命はどうでもいいという風潮について、このような風潮はいつ頃から現れたのかについて見ていった。また、このような風習は彼らの幼いころから身について、そして彼らが大人になったとき、また彼らの子供へ伝えられると考えられる。

第五章では、「学級管理制度」の弊害について見ていき、韓寒がこのテーマを取り上げた目的は何かを考えた。「学級管理制度」は賄賂による官職の売買、保護者の機嫌をとるための官職の乱立や幹部生徒と一般生徒の間に溝を作るなどのさまざまな問題を引き起こした。それによって、本当に組織能力を持っている生徒が埋没させられてしまうことを、韓寒はここで問題提起したと考える。

韓寒の作品を読んで、やはり最も印象に残ったのは彼の教育制度に関する考えである。高校入試制度に関する問題はとても頭を痛くさせる問題であるが、今のところは解決策はないだろう。『三重门』の後書きからは、「全面発達でなくてもいいから、偏っても、個性を出すこと」を支持していることがわかる。また、彼の作品におけるすべての主人公に共通する特徴がある。それは、みんな反逆的な素質があり、自分の周囲を取り巻く環境から脱したいと思っているが、結局自身の無力さを感じ、周囲に飲み込まれてしまうというところである。

新潟大学人文学部アジア文化履修コース

1960年代、日本におけるプロレタリア文化大革命研究

小黒 心子

1949年10月1日に中華人民共和国が成立して以来、中央人民政府主席となった毛沢東は1958年に重工業生産を優先する「大躍進運動」を行ったため農業生産は停滞し、中国全土は食糧難に陥った。そこで劉少奇らによって「調整政策」が開始された。しかし毛沢東は劉少奇を「党内の資本主義を歩む実権派」であるとして、1966年、「黒五類」と呼ばれる人々への批判を開始した。この運動を「プロレタリア文化大革命」といい、紅衛兵と呼ばれる多くの学生が動員され、毛沢東が死去する1976年まで続いた。本論文では、文革期の日本の新聞や中国研究者に焦点を当て、日本の「一般の人々」や「知識人」が中国で起こっている文革の実態やそれに至る過程をどこまで理解し、どのように捉えていたのかを検討した。

第1章では、「大躍進運動」から文革闘争に至る歴史的流れを概観した。

第2章では、1966年5月1日から1976年9月10日までの『朝日新聞』を分析対象とし、考察を加えた。『朝日新聞』の情報源は、壁新聞を情報とする北京・香港特派員と中国共産党中央の管理下に置かれている新聞や雑誌であったため、『朝日新聞』の記事の傾向として文革を支持するものが多くなることは必然的である。しかし朝日新聞社内部でも本社の記者が文革を批判的に捉える一方、現地特派員は支持する立場をとるなど文革の見方に相違があった。また『朝日新聞』は1966年5月の時点では文革を「整風運動」と記載していたが、同年6月になると毛沢東と劉少奇との路線政策上の相違から発生した「権力闘争」とする見方を強め、同年8月には毛沢東・林彪派と劉少奇・鄧小平派との「指導権争い」と捉えていた。『朝日新聞』は文革当初から毛沢東の死去まで文革一連の流れを報道し続け、その一挙一動に注目し多くの記事を掲載し、迅速かつ正確な報道を行っていた。

第3章では、文革礼賛派の1人である安藤彦太郎を例にあげ、安藤の活動・体験を追い、文革を礼賛した経緯について考察した。安藤は学生時代に「支那語」を学び、中国留学生との交流を通して「中国」を肯定的に捉え始めたと考えられる。日本において中国語は、1870年代から1945年まで「特殊語学」や「戦争語学」として軽視されていた。また「五四運動」や「一二・九運動」は、当時の日本の新聞機関によって不正確に伝えられていた。安藤は、こうした日本人による中国に対する「見そこない」が文革においても行われていると批判した。そして文革について、当初は否定的に捉えられることもあるがその意義が次第に明らかになることで批判する者もいなくなるとして、文革を礼賛する立場に立ったと考えられる。

本論文では、文革期の日本において文革を礼賛した人物には、実際にその時代に中国に赴き、文革を自らの眼で見たという共通点があった。しかし彼らの行動は中国共産党中央に監視・制限されていたため、文革の「真実」を見たとは言い難く、彼らが見た文革は中国共産党の意向が強く反映されたものであったと考えられる。そしてこの「情報の制限」が、当時の日本の新聞や中国研究者の間で文革を礼賛する傾向が強かった理由の1つであると言える。

沈従文『辺城』研究
── 水との関係に注目して水との関係に注目して

柄沢 道子

沈従文（1902 ～ 1988）は『辺城』（1934年）によって世界に名を知られる中国の作家の一人である。彼の小説には故郷湘西(湖南省西部)の辺境の美しい風物やそこに暮らす少数民族の習俗が流麗な筆致で描かれており、この濃厚な風土色は沈従文作品の最大の魅力である。本論文では、沈従文自身がしばしば「私の創作と水は切り離すことができない」と述べるなど、彼が水に対して特別な思いを抱いていることに注目し、代表作『辺城』を対象に、その舞台である河の描写に注目して読み解くことで、彼の作品において水がどのように描かれ、どのような意味を持つのかを明らかにすることを目的とした。

第一章では、沈従文の略歴と彼の文学の特徴をまとめた。

第二章では、二十歳で沈従文が北京に出るまでの幼少期や軍隊生活を描いた『従文自伝』によって、彼と河との関係を具体的に述べた。少年時代の沈従文は頻繁に水と直接的に触れ合い、自然と人間の関わり方をよく観察することで、自然や人間の営みに基づいた「知識」を河から得ていた。また軍隊に入隊した後は、河を眺めて思索にふける姿が多く描かれるようになることから、沈従文がこの頃から次第に河に「知恵」を求めるようになっていったのではないかと考えた。二十歳までの生活を常に河とともに過ごした沈従文にとって、河は最も身近な友人であり、人生の良き師のような存在であった。

第三章では、『辺城』を河の描写に注目して考察した。まず、物語における水の描写の少なさと、『辺城』を形作る強い山水のイメージとの食い違いを指摘した。そこで、読者に水のイメージをもたらす要因として考えられる河の描写を三つに分けて考察した。一つ目は生活の基盤としての河である。茶峒では経済的にも文化的にも河が重要な役割を担っており、それが当地の風土色として作品に色濃くにじみ出ている。物語の背景に舞台として存在する生活の河こそが、この作品全体を包み込む大きな河として強い存在感を示している。二つ目は、主人公翠翠の心理を投影する河である。作者は、本来なら読解の手がかりとなる主人公の心情を曖昧にし、あえて直接的に描かないことで、心理を投影する河のイメージを鮮明に浮かび上がらせている。そして三つ目は登場人物の死、及びそれを暗示する描写と結びつけて描かれる河である。『辺城』では、物語において重要な転機となる登場人物の死にことごとく水が関連付けられている。それによって水を中心に物語が展開するという印象を読者にもたらす効果を果たしているのである。

このように『辺城』には舞台としての清澄な河の描写の他に、人々の生活を包み込む大きな存在として、主人公の心理描写の代替として、あるいは物語中の印象的な出来事と結びついて描かれ、さまざまな角度から河をより強く印象付ける役割を果たしていた。さらに、これらの河はどれも作者自身の経験に基づいて描かれている。翠翠にとってそうであったように、沈従文にとっても河は最も身近な存在の一つであり、彼は河から多くの知識と知恵を得た。河と共に成長し、河のさまざまな表情をその目で見てきた沈従文だからこそ、『辺城』の作品にもこのようにいろいろな方面から写実的に河を描き出すことができたのである。

新潟大学人文学部アジア文化履修コース

1910年代における日本人の内モンゴル研究

鈴木 麻美

本論文では、その地理的状況から中国、ロシア、日本の勢力争いの地となり、常に不安定な位置に置かれていた内モンゴル地域の、日本における研究の歴史を追った。1910年代の日本における内モンゴル調査機関、またそれら機関が行っていた調査内容を検討することにより、当時の日本政府がどのような視点で内モンゴル地域を捉えていたのか、内モンゴルという地にどのような価値を見出し、研究を行ったのかを明らかにすることを目的とした。

第一章では日本における内モンゴル研究の歴史を追った。日本において内モンゴルについての調査、研究がなされていく過程を、調査、研究が行われ始めた明治期以降から1940年代までの期間を概観した。さらに、1910年代の調査資料や報告書に「東モンゴル」、「東部内モンゴル」といった地域区分が用いられた背景や、実際これらの名称が用いられた地域はどのような地域を指していたのかを明らかにした。

第二章では、1910年代に作成された調査報告書、刊行物の調査内容に焦点を当てた。ここでは、それぞれの刊行物から「東モンゴル」、「東部内モンゴル」の地域範囲について触れた個所を取り上げ、これらの地域範囲の定義づけを検討した。当時の日本は、内モンゴル地域において、ロシアとの勢力範囲確定のために関東都督府陸軍部を中心として地誌作成につとめていた。「東モンゴル」、「東部内モンゴル」という地域名は、日本が内モンゴルの地誌作成上、便宜的に用い始めた地域名であり、そのため1910年の時点ではこれらの地域の定義は定まっておらず非常に曖昧であった。

さらに第二章では、1910年代に作成された調査報告書や資料をもとに、内モンゴルにおける畜産業に関する記述を検討した。1910年代に行われた調査資料や報告書には、内モンゴルの牧畜に関する記述が多く見られた。当時日本は自国の食糧供給を国内で十分に確保することができず、勢力拡大を目指していた「東部内モンゴル」において、水稲、羊肉、羊毛などを大規模に生産する事を計画したのであった。このような背景から、当時の日本は内モンゴルにおける畜産資源に注目し、家畜の改良や試験場設置を促す報告書が数多く作成されたと考えられる。

以上日本における内モンゴル地域の調査、研究を検討し、考察を行った。内モンゴルの調査報告書が次々に作成された1910年代には、日本はロシアとの間で幾度と交渉を重ね、それまで存在しなかった「東部内モンゴル」という地域範囲を生み出した。また、調査報告書からは、当時の日本が勢力拡大を目指す内モンゴル地域において、日本国内への畜産供給を確立しようとした。1910年代に作成された内モンゴル地域の調査報告書からは、当時日本が抱えていた問題や、大陸進出のより具体的な方針の一部を垣間見ることができるのである。

開城工業団地をめぐる南北関係

田辺 亮太

1998年、韓国の現代峨山と北朝鮮の民族経済協力連合会とが南北工業団地の共同開発に合意した。この開城工業団地（開城工団）開発の構想は、施行を担当する現代峨山と設計・管理を担当する韓国土地公社とが、北朝鮮から総敷地面積延べ66㎢の50年間の租借の認可を受け、うち約30㎢は工業団地として造成、残りを住宅都市として建設するというものであった。それから現在に至るまで、開城工団は拡大しながら操業が続けられてきた。しかし、南北融和の象徴とも言うことのできるその開城工団は、朝鮮半島の情勢の影響をしばしば受けざるを得なかった。朝鮮半島の情勢変化に伴い、開城工団は政治的思惑に利用されるなど、それは単に南北融和の象徴というだけでなく、双方にとってさまざまな影響力を持ち、また、生産の拡大とともにその役割の重要性も高まっていったように思われる。本稿では、開城工業団地の南北朝鮮における役割とその変化に注目し、南北情勢の変動に伴い、南北の政治・経済・社会に対していかに影響され、またいかに影響を及ぼしたのか、そしてどのように南北関係のなかでその役割を変えていったのかについて考察を試みた。

第１章では、開城工団が南北間において重要性を拡大していく過程を、開城工団における生産額、韓国人の開城工団への訪問者数（観光客を除く）、労働者の推移、そして開城工団の入居韓国企業数の推移といったデータから考察した。また、開城工団が拡大していく背景に存在する南北双方の政策や動向を明らかにした。韓国側においては、具体的に、南北間に生じたさまざまな事態を受けた開城工団入居企業の動向、そしてそれに対する韓国政府の措置について明らかにした。

第２章では、新聞報道から、拡大していくにつれ、期待から批判へと韓国世論の認識を変化させていく開城工団の南北関係における役割の変化について考察を行った。

以上の考察から、開城工団の南北関係における重要性の拡大課程とその要因、そして影響を明らかにすることができた。開城工団事業は企業の進出の中止や撤退の危機が発生しても、韓国政府の積極的な企業支援やインフラ整備、そして北朝鮮の労働者増員により拡大を続けた。当初は、南北関係において平和交流の柱として、また、韓国中小企業の再生への突破口として登場した開城工業団地事業であったが、事業が拡大していくに連れて、韓国世論を工業団地への批判とともに北朝鮮への態度悪化の方向へ導くようになる。南北関係に影響を及ぼすようになったのである。それは、開城工団の南北関係における重要性が高まっていたからであるといえよう。「平和交流の柱」は、重要性が高まるにつれ、南北関係に影響を及ぼし、主に悪化させる「変動要因」に、意義が変化してしまったと言うことができるだろう。

また、開城工業団地の拡大に伴い、北朝鮮にとっての事業の重要性も拡大することになった。北朝鮮が起こした南北関係を揺るがせる問題によって、開城工業団地は拡大していくことになったのである。北朝鮮は南北関係を悪化させる事態を起こした際の韓国側の企業への支援強化やインフラ拡充による開城工団事業推進という対応措置を先読みし、韓国側に挑発的な行動をとったと推測することができるのではないだろうか。

新潟大学人文学部アジア文化履修コース

中国における戸籍管理制度
― 中央の政策と内モンゴル自治区の事例と共に ―

倪　舒怡

従来、中国において戸籍は、徴税、徴兵のために用いられてきたが、現代の中国では都市住民と農村住民を分離する政策として役割を果たしている。つまり、都市住民には都市戸籍、農村住民には農村戸籍が与えられ、農村から都市への移動・戸籍変更が厳しく制限されてきた。そのため、都市住民と農民住民の待遇の差は拡大し、それは経済格差のみならず、両者の生活習慣や価値観までも変化させた。本論文は、中国中央政府および公安局によって制定された「条例」、「法案」を日本語訳にした上で、戸籍管理制度の改革過程について分析し、さらに「内モンゴル自治区」に焦点を当て、民族区域における戸籍管理制度の変遷について検討した。

第１章では中国の「戸籍登記条例」が制定される前の「戸籍」の意義および概要について述べた。また、戸籍に関する中国法の用語には日本法と異なる部分があるため、戸籍管理に関する重要な用語の意味について説明をした。

第２章では戸籍管理制度の形成期（1949年～1957年）について検討した。戸籍管理制度の土台は中華人民共和国の誕生（1949年）以降、1957年までの間に形成された。この時期の戸籍管理は、単に公民住居の現状、変更の登録を求めるものであり、都市・農村を問わず、移動や移住を制限するようなものではなかった。一方、この時期、内モンゴル自治区においても、自治区公安局によって戸籍管理業務が整えられた。

第３章では、1958年１月に制定された「中華人民共和国戸籍登記条例」によって、中国政府が人々に移動を厳格に統治する過程を追って見てきた。中国では、1958年から1977年までの間に、「農村戸籍」と「都市戸籍」が厳格に区別され、都市と農村では全く異なった社会が構成され、異なった社会的保障と待遇を受けるという二重社会構造が形成されたのである。一方、内モンゴル自治区では、大躍進によって人口が大きく変動し、戸籍管理業務では一時的な混乱があったもの、全国の戸籍管理業務と同様、戸籍登記制度によって、人々の移動が厳しく制限されてきた。

第４章では、改革開放期（1978年）から現在に至るまでの戸籍管理制度の緩和政策について見てきた。1980年代、改革開放により、沿海地域に活発な経済活動が行われるようになり、それに伴って大量な労働力需要が生じた。そのため、農村部から都市部へと人口の移動が始まった。当初、このような動きを「盲流」として規制の対象としたが、徐々にその労働力が評価されるようになり、農民労働者の「暫住戸籍」を認めることとなった。暫住制度の改革に追う形で、戸籍制度自体も一方大きく変革を遂げることになったのである。

以上、中国における戸籍管理制度の変遷、および改革について検討した。戸籍管理制度は、1970年代まで中国の政治的・経済的な状況変化に応じて、人口の移動をコントロールする政治手段であって、国家戦略の達成に一定の役割を果たしてきたと言える。近年、戸籍管理制度に関する制度的規制が緩和され、戸籍管理制度によって人口移動を抑制する中央政府の姿勢が変化しつつある。しかし、長年にわたって、二元戸籍管理制度に基づく、都市と農村の二元社会の間に生じる大きな格差を埋めることは至難である。今後の経済発展のために、また、格差社会という問題を解決するためにも、戸籍管理制度の見直しは長年に渡って課題になるだろう。

『荘子』研究
― 外見的に異常な登場者に関する一考察 ―

毛利 真大

『荘子』は哲学書であると同時に優れた文学書としても読まれてきた。それは、数多くの登場人物が描かれていることが理由の一つであろう。なかでも特徴的な例として、しばしば外見的に異常な人間、すなわち不具者が登場することを挙げることができる。これらの登場者は、『荘子』において一様に優れた評価を付与されているから、明確な作者の意図をもって登場させられたと考えられる。したがって、本論文ではこの点に関して詳細に検討を加え、作者が彼らを通して読者に伝えるメッセージとは何か考察する。

第一章では、外見的に異常な人間を取りあげ、その異常が先天的な要因によるものと後天的な要因によるものとに分類して考察をした。

第二章では、外見的に異常な動植物についての考察を行い、「無用の用」の思想を仮託された登場者であるとの結論を導いた。ここで、第一章の人間、第二章の動植物に共通することとして、外見的に異常な登場者とともに必ず他者の視点が描かれていることをも指摘した。そして、他者が世俗的な視点を持っており、異常な登場者が非世俗的な視点から、それを否定し解消するという対比構造があることを論じた。

第三章では、まず『荘子』の寓話の特徴を分析し、次に寓話という表現手法がなぜ『荘子』に特徴的なのかを論じた。すなわち、万物を一つに貫く絶対的な原理を道に見出し、人知に基づく相対的概念を一切認めない『荘子』の思想にあっては、道の体得の境地は言語によって表出すること、直接的に顕示することは不可能であった。したがって、『荘子』の理想とする人格者は、みな仮想空間に描かれたいわば神話的な描写でしか存在し得なかったのである。しかし、『荘子』はあくまで言語によって、その思想を伝えるべく、外見的に異常な登場者に『荘子』思想の体得を託け、寓話という手法によって仮想空間から現実世界への転換をおこなったのであった。現実に生きる人間と同空間に、可視的な形態をもって、異常な登場者を登場させるのである。現世に生きる他者と対面し、対話することによって、『荘子』が理想とする現実離れした世界を現実世界に還元する必要があった。そのためには、寓話のなかに世俗の視点と非世俗の視点の対比構造を展開することが必要不可欠であったのである。

そしてそこには、『荘子』特有の逆転の論理がはたらいていて、世俗の価値観を認めず否定することで自らの世界を逆説的に浮き上がらせるという方法が用いられているのである。彼らの外見の異常さは、世俗の視点があるからはじめて異常とみなされるのであって、それさえ忘却すれば、たちまち異常は消滅し解消され、『荘子』思想の体得に昇華されるという究極の対偶をも有していたということができる。

新潟大学人文学部アジア文化履修コース

植民地期朝鮮における朝鮮総督府の神社政策について

矢川 博基

朝鮮において建立された神社は、明治維新後、朝鮮に渡航した日本人居留民がその居住地に、日本の神をまつる神社を建てたことにはじまる。総督府は、1915年に神社制度を発足させ、朝鮮における神社・神祠(小規模な神社)の開設・運営に介入することで、朝鮮民衆を管理下に置いた。本論文では、植民地期朝鮮のなかでとくに神社・神祠が積極的に建立された全羅南道に焦点をあて、地域社会における神社・神祠の建立の実態について考察した。

第1章では、植民地期朝鮮における神社・神祠を概観し、総督府の神社政策が展開されていく過程を明らかにした。総督府は、日本人居留民による神社の濫設を防ぐために1915年に「神社寺院規則」、1917年に「神祠ニ関スル件」を制定し、新たな神社・神祠を建立する際に総督府の許可が必要となった。やがて、1925年に朝鮮神宮が創建され、36年に神社制度が改正された。また、1938年から朝鮮の各面に1神祠を置くという「1面1神祠政策」が実施されたことで、神社・神祠の数が急激に増加し、神社政策は本格化した。

第2章では、全羅南道の神社・神祠数が増加していく過程と、その過程において誰が主体となってそれらを建立したのかを考察した。全羅南道では、1910年～40年代前半にかけて10の神社が建立された。これらのうち、小鹿島神社を除く9社が建立された地域は、いずれも全羅南道における政治的・経済的中心地で、人口も多く、とくに日本人が多数居住している地域であった。それに対し、小鹿島神社が建立された地域は政治的・経済的中心地ではなく、ハンセン病患者を強制的に隔離するための病棟がつくられた地域であった。また、全羅南道では、1938年6月末から神祠を増設していく方針をとっており、この時期に入って、従来日本人中心だった神祠建立の許可申請を朝鮮人もするようになった。そうした朝鮮人のほとんどは職業が面長となっており、朝鮮人の面長が総督府の指示に基づいて、面民を動員して神祠を設置したものであるということが推測できた。

以上のように、総督府の神社政策は、神社制度の導入、朝鮮神宮の創建、神社制度改正と1面1神祠による政策の本格化という過程をたどった。とくに、1938年からの1面1神祠政策の実施によって、神社・神祠は急激な増加をみせるようになったが、その増加の大半は、全羅南道においてであった。全羅南道の神社については、一貫して日本人が主体となって建立したのに対し、神祠については、「1面1神祠政策」を機に、その建立の主体が日本人から朝鮮人へと大きく入れ替わっていったといえるだろう。

新潟大学人文学部アジア文化履修コース

崔仁浩の初期短編小説研究

柳　千晶

崔仁浩は、1970年代から現在に至るまで幅広い執筆活動を続けている作家である。本稿では、崔仁浩の1970年代の作品を初期作品とし、作者が作品を通し読者に何を伝えたかったのかを考察した。扱った作品は七編である。第一章第一節では、子どもを主人公にした「酒飲み」(1970年)「模範童話」(1970年)「処世術概論」(1971年)を、第一章第二節では、マンションを舞台にした「他人の部屋」(1971年)「アリの塔」(1971年)を考察した。第二章では暴力を描いた作品として第一節で「未開人」(1971年)を、第二節では「恐ろしい複数」(1972年)を考察した。

第一章第一節で取り上げた三作品には全て、子どもらしくない子どもが主人公として登場した。「酒飲み」の少年は、いなくなった父親を探していると嘘をつきながら居酒屋をまわり、人生に絶望した酔っ払いたちと一緒に酒を飲む。「模範童話」では、主人公である転校生の少年が、子ども相手に商売をしているカンさんの子供騙しを見破り自殺に追いやった。「処世術概論」の主人公ジョンアは、財産相続を狙う両親によって老おばあさんの家に送り込まれ、そこで自分の子どもらしくない本当の姿に気づいた。子どもたちは、子どもが子どもらしく生きられず、大人も子どもも人生に絶望したり、嘘をついて生きていくしかない世界を読者に見せてくれている。

第一章第二節の「他人の部屋」と「アリの塔」には、仕事に疲れ、親密な人間関係がない男や、人々の欲望をかき立てることに追われて生きるような男が登場した。これらの作品は、人間らしさを失った現代人に警鐘を鳴らす作品であると考えた。

第二章第一節で取り上げた「未開人」では、世の中には暴力や破壊について三種類の人間が存在することが描かれていた。この作品は、主人公の教師「私」が、「パク」という男を代表とした村の人々の暴力から、学校に通う陰性ハンセン病患者の子どもたちを守るという話だ。主人公の「私」、「私」の同僚である「チョン先生」、「パク」がそれぞれ、暴力に立ち向かう人間、暴力を見て見ぬふりをする人間、破壊する人間として描かれていることがわかった。またこの作品では、明確な目的がなく、本能的な敵対感情から生まれる暴力が描かれていた。

一方、第二章第二節の「恐ろしい複数」で描かれた暴力は三種類ある。この作品は、学生デモが頻発する1971年の韓国の学生街が舞台となっている。主人公で、デモを傍観するだけのジュノと、学生デモの主導者オ・マンジュンの交流を通し、他人に巻き込まれる暴力、互いを憐れに思いながら与える暴力、そして、一度人々に祭り上げられた後で、そこから降りようとする人に冷たく接する暴力が描かれていた。

崔仁浩の作品に登場する主人公の多くは、希望を持っておらず、悪や嘘や暴力、憤怒、疲労などの負の条件を持っていることがわかった。

韓国絵本研究
― 昔話絵本と日本での受容について ―

山田 文恵

近代の朝鮮児童文学は、日本の植民地統治下で発展し、日本との関わりの中で研究されてきた。しかし植民地統治から解放されて60年以上が経過した現在の韓国では、教育や社会状況が変化し、世代交代が進み、児童文学の分野でも大きな転換期を迎えている。特に絵本の分野では、韓国の絵本が国際的な評価を受け、国外でも翻訳絵本が出版されるなど、世界的に発展を遂げている。日本でも韓国絵本の翻訳出版が近年盛んになり、現在出版されている韓国絵本は50冊を超えている。本稿ではその中でも昔話をもとにしている絵本をとりあげ、韓国絵本の特徴を考察した。また、絵本出版社100社の協力による絵本のポータルサイトである「絵本ナビ」に投稿された読者レビューを参考にし、韓国絵本が日本の読者にどのように受容されているかを考察した。

第1章では、日本で出版されている韓国昔話絵本9冊を取り上げた。それぞれの絵本について、あらすじ、もとになった昔話、日本に存在する類話、読者レビューを紹介した。韓国の昔話絵本は、昔話を忠実に再話しているものが多かった。韓国らしい風物が絵になることでより昔話の世界を楽しめるようになっている。日本に類話があるものについては、両方を比較して楽しんでいる読者が多くみられた。類似する昔話や話の特徴が日本でもなじみ深いものとなっている作品は、読者レビューも数が多い傾向にあった。話が似ていても、登場する人物や物、生活の情景などに日本にはない文化を見ている人も多かった。また、訳者の創意工夫で韓国語音のままに記された擬声語や感嘆詞に関心を寄せる読者もいた。これは韓国語の絵本を出版する際に、日本の読者により楽しんでもらうための手法の一つと言えることが分かった。

第2章では、もとになった昔話が同じである『あまのじゃくなかえる』と『あまがえるさん、なぜなくの？』について、絵本になることで話にどのような違いが出てくるかを考察した。合わせて日本での受容も1章と同様に見た。『あまのじゃくなかえる』の方は母親の心理描写が多く、母親の困った顔が絵で印象的に描かれている。一方『あまがえるさん、なぜなくの？』は心理描写は少なく、母と息子のやりとりが簡潔に書かれ、絵は子どもが落書きしたようなタッチで描かれている。このことから、『あまのじゃくなかえる』は教訓性が強く、『あまがえるさん、なぜなくの？』は、あまがえるが鳴くようになった由来を小さな幼児にも分かりやすく伝える絵本となっていることが分かった。読者レビューを見ても、『あまのじゃくなかえる』の方に教訓性を感じたというレビューが多く、ここからも2つの絵本の違いを見ることができた。

以上本稿では、日本で出版されている韓国の昔話絵本について、読者レビューも参照しながら、韓国絵本の特徴と、読者がどのように受け入れているかを見てきた。今後韓国絵本の翻訳がさらに進み、多くの読者に読まれることを期待したい。

保定陸軍軍官学校
── 清末明初の軍制改革と保定 ──

和田 結衣

保定陸軍軍官学校（以下、保定軍校）とは、1912年に開学した将来の陸軍将校を養成するための学校である。この保定軍校は、清末から行われた軍制改革の結果、袁世凱が開学した軍校である。本論文では、保定軍校に焦点をあて、清末の洋務運動から新軍編制、中華民国北京政府までの軍事に注目し、連続性を伴う研究を行うことを目的とした。こうした研究は、これまで管見の限り、ほとんど見られない。こうしたことから、中華民国史研究の課題に取り組むことと同時に、保定の歴史的重要性を再確認していく。

第一章では、保定市の地理及び歴史について概括した。中国河北省保定市は、河北省中部において、北は北京市と張家口市、東は廊坊市と滄州市、南は石家荘市と衡水市、西部は山西省と隣り合った場所に位置している。保定は、古くから国境や辺境となることが多く、軍事的要所となっていた。元代になると、首都の大都（現在の北京）を安定させる、という意味の「保定路」と名付けられた。後に、保定は直隷省都に定められ、直隷総督が派遣される場所となる。清末の直隷総督には、外交や洋務運動に関わる多くの権限が集中するようになっていた。袁世凱も、この直隷総督となった1人である。

第二章では、軍制改革及び新軍編制に深く関わった袁世凱の一生を追い、また清末から中華民国初期までに行われた、洋務運動から新軍編制までを一つの流れとしてまとめ、その中の軍制改革として開学された各種軍事学堂について検討した。袁世凱は、幼くして武官として出世することを決意し、派遣された朝鮮では親軍の組織を行った。帰国後、袁世凱は、光緒帝から新軍の組織を任される。袁世凱が編成した新軍は、それまでに曾国藩や李鴻章の軍隊とは異なった強力な新軍であった。新軍の組織と同時に、袁世凱は各種軍事学堂の開学も行っていた。彼は、こうした軍事学校の卒業生をもとに、新軍をさらに拡充させていった。こうして開学された軍事学堂の一つが保定軍校であった。

第三章では、保定軍校の実態と開学期間中を総括し、保定軍校が後に与えた影響について考察した。袁世凱の死去した1916年を区切りとして、開学期間を2つの分け、それぞれに保定軍校の変遷をまとめた。開学前期は、保定軍校の開学期間の中でも、比較的平穏な時期であった。後期の保定軍校は、校舎の焼失によって1年間の休校を余議なくされる。学生の学校再開運動によって、再び授業を始めるものの、経費の問題及び直系軍閥の解体によって閉校した。この保定軍校は、1912年から1923年の11年間に開学され、その後の中国軍隊や社会に大きな影響を及ぼした。卒業生による、中国社会及び後に開学される黄埔軍校への影響が大きいことが、この理由である。第1期卒業の楊傑、第3期卒業の張治中、第6期卒業の鄧演達、第8期卒業の陳誠の著名な4人を取り上げ、保定軍校の卒業生が具体的にどのような進路を選び、影響力を持ったのかを検討した。

以上、古代から清朝にかけての保定の姿を概括することに加え、保定軍校の姿を明らかにすることで、中華民国成立後も保定が軍事的要地であり、影響力を持っていたことが分かった。しかし、筆者の力不足によって保定軍校の規模、独自性を明確にするには至っておらず、また資料も不足している。今後は保定軍校についての資料や日本陸軍の資料を用いて、より理解を深めていきたいと考える。

新潟大学人文学部アジア文化履修コース

日本の朝鮮侵略に対する明朝の対応について

綿貫　希

本論文でいう日本の朝鮮侵略とは、1592年から1598年まで、豊臣秀吉が動員した日本軍による朝鮮侵略戦争である。秀吉は日本国内統一をとげた後、さらに明を征服することを企て、まず朝鮮に帰服と明への先導を求めた。しかし朝鮮がこれを拒否したため、1592年4月に日本軍が朝鮮へ進撃し開戦となり、同年6月には朝鮮の援兵要請に応じた明軍の出動によって明と日本の交戦となる。1598年の秀吉の死による日本軍の撤退により、戦争は終結する。本論文では、この戦争に対する明朝の動向、政治の状況を16世紀の東アジア国際秩序と関連させて考察する。

第一章では政策決定の前提となる明朝の対外政策についてまとめる。16世紀、世界的に交易活動が活発化する中で、伝統的な中国の冊封・朝貢体制は弛緩し、新しい東アジア国際秩序が築かれつつあった。従来、周辺諸国は利害をもって軍事的・経済的に優位な中国と「封貢」関係を結ぶことで東アジアにおける安全保障を得てきた。しかし、征明を掲げて朝鮮侵略を行った日本にとって、中国との関係は、侵略可能な、対等な外交・軍事関係であったと考えられる。

第二章では第一次戦役における明朝の対応を考察する。朝鮮への援兵派遣後、早くから明日講和交渉が行われる。日本と直接交渉を行った沈惟敬の朝廷への復命から明の史料では「日本が中国の威を畏れて罪を悔い、封貢による和平を求めている」という。しかし、明側でも財政難や兵の士気の低下から和平を望む要因は多くあり、政府は和平路線をとった。朝廷では講和条件の「封貢」をめぐる論争が起こり、多くの和平・封貢反対意見が出された。しかし、皇帝や政府は第一章で述べた従来の東アジアの国際秩序の崩壊という状況を理解しておらず、「封貢」や「日本国王冊封」のみで戦争の解決が可能と考えていた。講和交渉は、明が講和のために秀吉の「冊封」のみを認めるという結論を出し、これが秀吉の講和条件とは食い違っていたために講和の決裂と言う結果になる。

第三章では講和交渉失敗後の第二次戦役における明朝の対応を考察する。前役の「封貢」による講和交渉の失敗から、政府の方針は主戦となる。主戦派は中国を中心とする東アジア国際秩序の枠組みの中で日本との関係を調整するのではなく、日本の侵略性を認め、中国の安全のために戦いは必須と考えていた。しかし、朝廷では主戦派と講和派が対立しており、論争は続いていた。また、朝鮮派遣明軍の現地指揮官には戦意喪失があり、指揮官の独断で日本軍との撤兵交渉が行われるなど、明軍の意見は不統一であった。第二次戦役においても、冊封・朝貢体制の崩壊という現実の上に立って日本との関係を考え、防衛体制を固めていくことは、依然として広く受け入れられるものではなかったのである。